十勝岳の火山活動解説資料（令和８年10月）

札　幌　管　区　気　象　台
地域火山監視・警報センター

３月以降、山体付近のやや深部の膨張を示す地殻変動、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加、62-2 火口付近及びその周辺における地震活動の活発化、熱活動の高まりが認められ、７月下旬から８月上旬にかけては 62-2 火口付近でごく小規模な噴火が複数回発生しました。
その後、８月中旬から９月中旬にかけては、山体付近（主に 62-2 火口周辺）で振幅の大きな火山性地震が増加しましたが、その後は減少し、地震活動は低調に推移しました。
このことから、62-2 火口から概ね３km の範囲に影響を及ぼす規模の噴火が発生する可能性は低下したと判断し、16 日 10 時 00 分に火口周辺警報を発表して、噴火警戒レベルを３（入山規制）から２（火口周辺規制）に引き下げました。
一方、８月頃以降も山体付近やや深部のわずかな膨張を示す地殻変動、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が多い状態及び 62-2 火口付近の活発な熱活動が継続しており、火山活動は引き続き活発な状態にあります。このため、62-2 火口付近では、今後もごく小規模な噴火が発生する可能性があります。
62-2 火口から概ね 1.5km の範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。
風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

○活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図１-①～⑤、図２-①～③、図３-①～③、図４～５、表１）

８月７日以降、噴火は観測されていません。

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙の高さは最高で火口縁上600m、同火口に隣接する振子沢噴気孔群の噴気は最高で稜線上300mまで上がりました。５月以降は、同火口及び噴気孔群の噴煙（噴気）がそれまでより高く上がるなど、62-2火口付近の熱活動に高まりが認められました。９月頃以降はやや衰退傾向が認められますが、引き続き活発に推移しています。なお、大正火口の噴気の高さは100m以下で経過しました。

62-2火口付近では、４月以降、夜間に高感度の監視カメラで発光現象（火映を含む）がしばしば観測されており、今期間も度々観測されました。この現象は、62-2火口付近での高温の火山ガス噴出や硫黄の燃焼等によるものと考えられます。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータ及び機動的な調査観測・解析グループ（国立研究開発法人防災科学技術研究所・東京大学）の観測・解析結果を利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和８年11月分）は令和８年12月８日に発表する予定です。

・火山ガスの状況（図２-④、図３-④）

７日及び８日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）放出量は１日あたりそれぞれ700トン及び900トンでした。４月から７月は１日あたり1,000～2,000トン程度、８月下旬以降は１日あたり1,000トン程度で推移しており、増加傾向は認められませんが３月以前と比べて放出量の多い状態が継続しています。

・地震及び微動の発生状況（図１-⑥～⑩、図２-⑤～⑦、図３-⑤～⑦、図６）

今期間の震源は、主に62-2火口付近のごく浅い所、グラウンド火口付近及び旧噴火口付近のごく浅い所～深さ１km付近（62-2火口の周辺）に分布しました。４月以降、62-2火口付近及びその周辺の地震活動はやや活発に推移しています。

８月中旬から９月中旬にかけて、山体付近（主に62-2火口周辺）を震源とする振幅の大きな火山性地震（山麓の硫黄沢観測点で最大振幅２μm以上）が増加するなど、地震活動にさらに高まりが認められました。しかしその後、振幅の大きな地震は発生しておらず、規模の小さな地震も少なく経過し、62-2火口周辺の地震活動には低下傾向が認められています。

一方、62-2火口付近では、引き続き地震回数の増減がみられ、７日には継続時間が約21分の火山性微動が発生するなど、地震活動に引き続き盛衰が認められます。

・地殻変動の状況（図２-⑧、図７～８）

GNSS連続観測では、2021年以降、62-2火口付近の観測点を中心に山体浅部の収縮傾向を示す地殻変動が観測されていましたが、2022年以降次第に鈍化し、2024年秋以降は特段の変化は認められていません。一方、山体を挟む一部の基線では、2026年３月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びが認められていますが、８月頃から鈍化しています。

また、国土地理院によるGNSS連続観測及びその解析によると、「美瑛（国）」-「新得（国）」等の山体を挟む長い基線でも2026年３月末頃から見られていたわずかな伸びは2026年８月頃から鈍化しています。

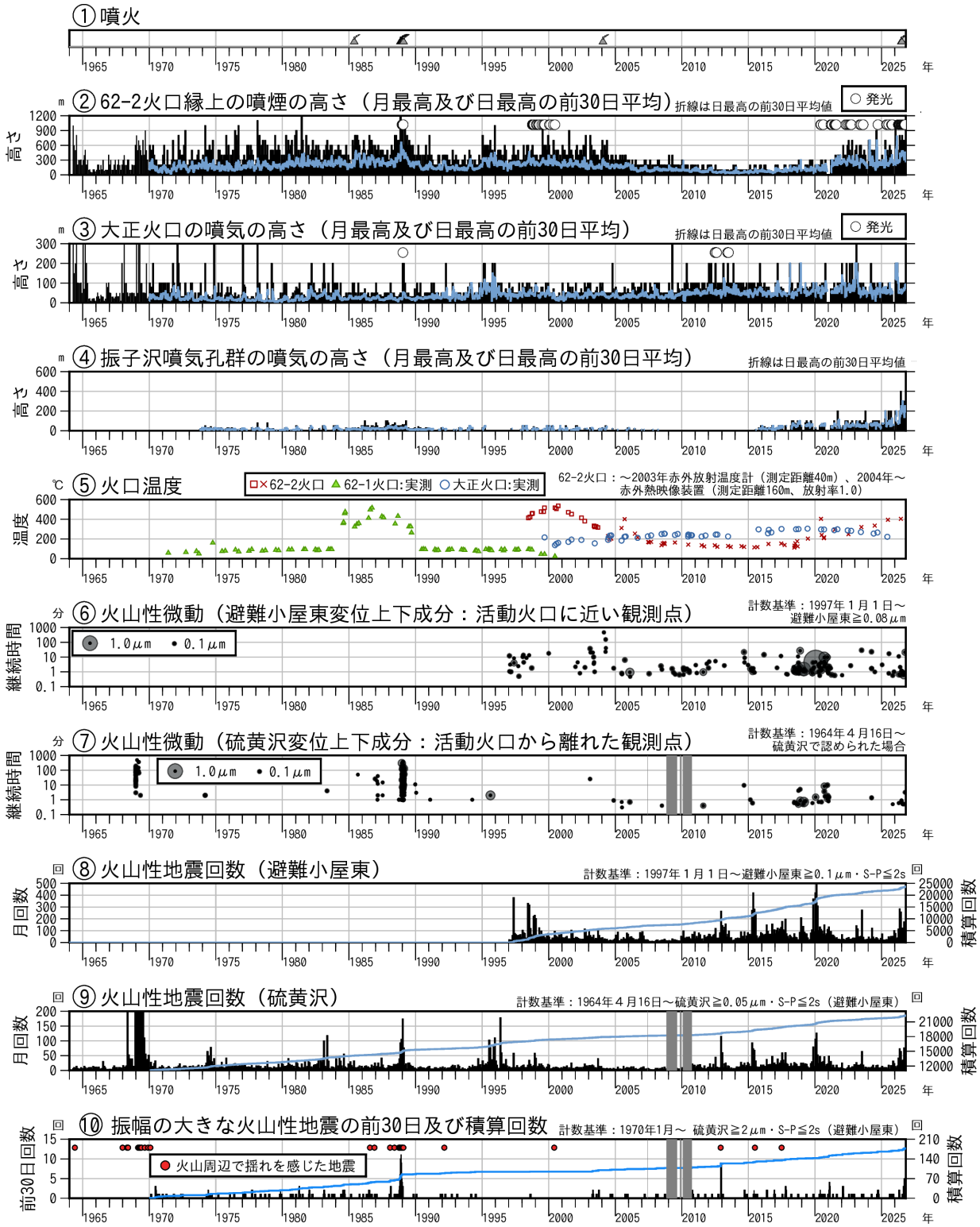


図１　十勝岳　火山活動経過図（1964年１月～2026年10月）

②の発光を示すプロットは、目視や監視カメラ等で 62-2 火口付近（62-2 火口内及びその近傍、振子沢噴気孔群も含みます）で発光が観測された日を示します。

⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び国立研究開発法人産業技術総合研究所のデータを含みます。

⑦⑨⑩の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

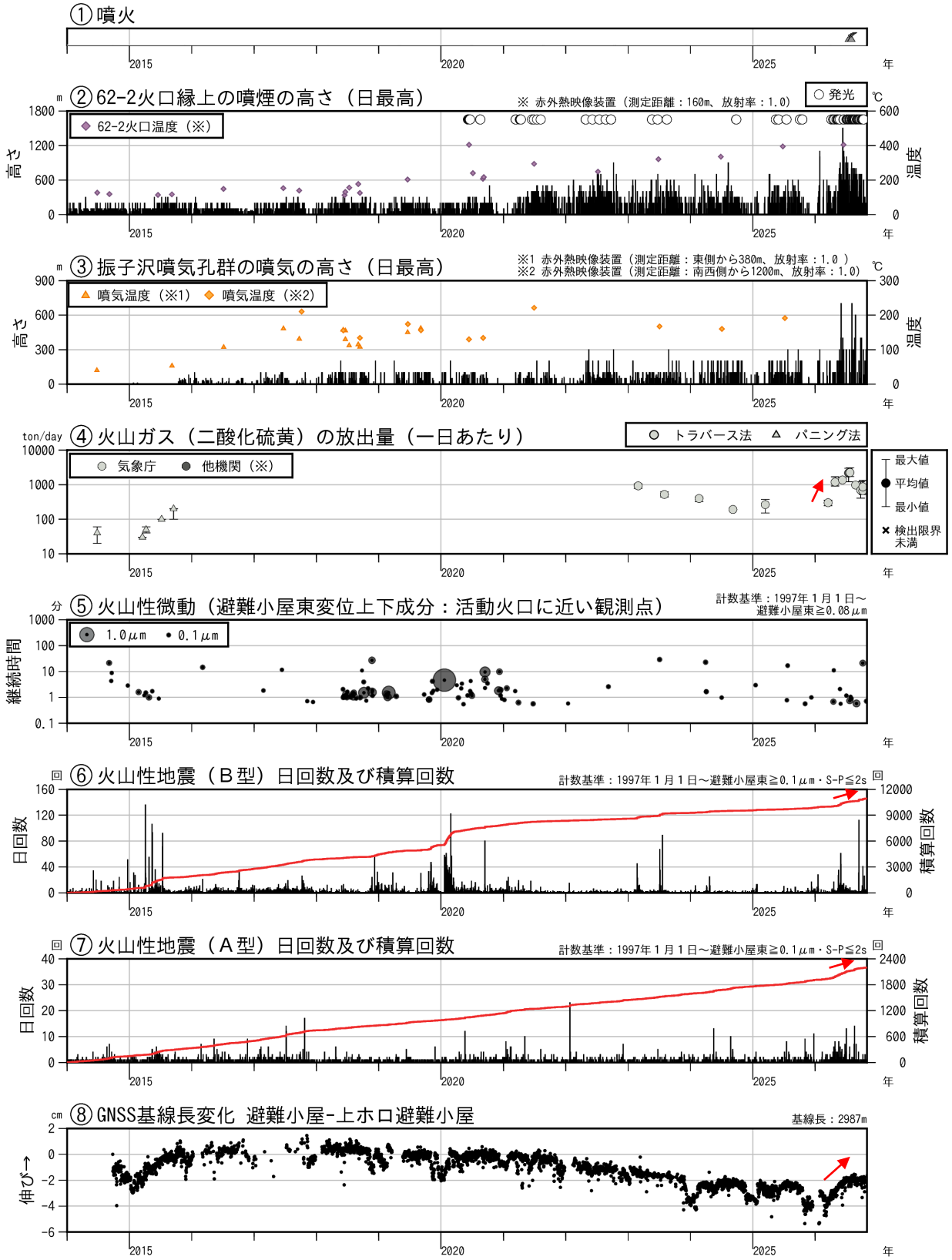


図２　十勝岳　火山活動経過図（2014 年１月～2026 年 10 月）

④他機関（※）は機動的な調査観測・解析グループ（防災科学技術研究所・東京大学）及び北海道大学の観測を示します。
⑥は主に 62-2 火口付近のごく浅い所（図６参照）で発生したと推定されるＢ型地震の回数、
⑦は主にその周辺で発生したと推定されるＡ型地震の回数を示します。また、赤折れ線はそれぞれの積算回数を示します。
⑧は観測点配置図（図８）の基線④に対応しています。

・３月以降、山体付近のやや深部の膨張を示すGNSS基線の伸び（⑧）が認められ、４月以降は、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加（④）、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化（⑥⑦）が認められています（赤矢印）。

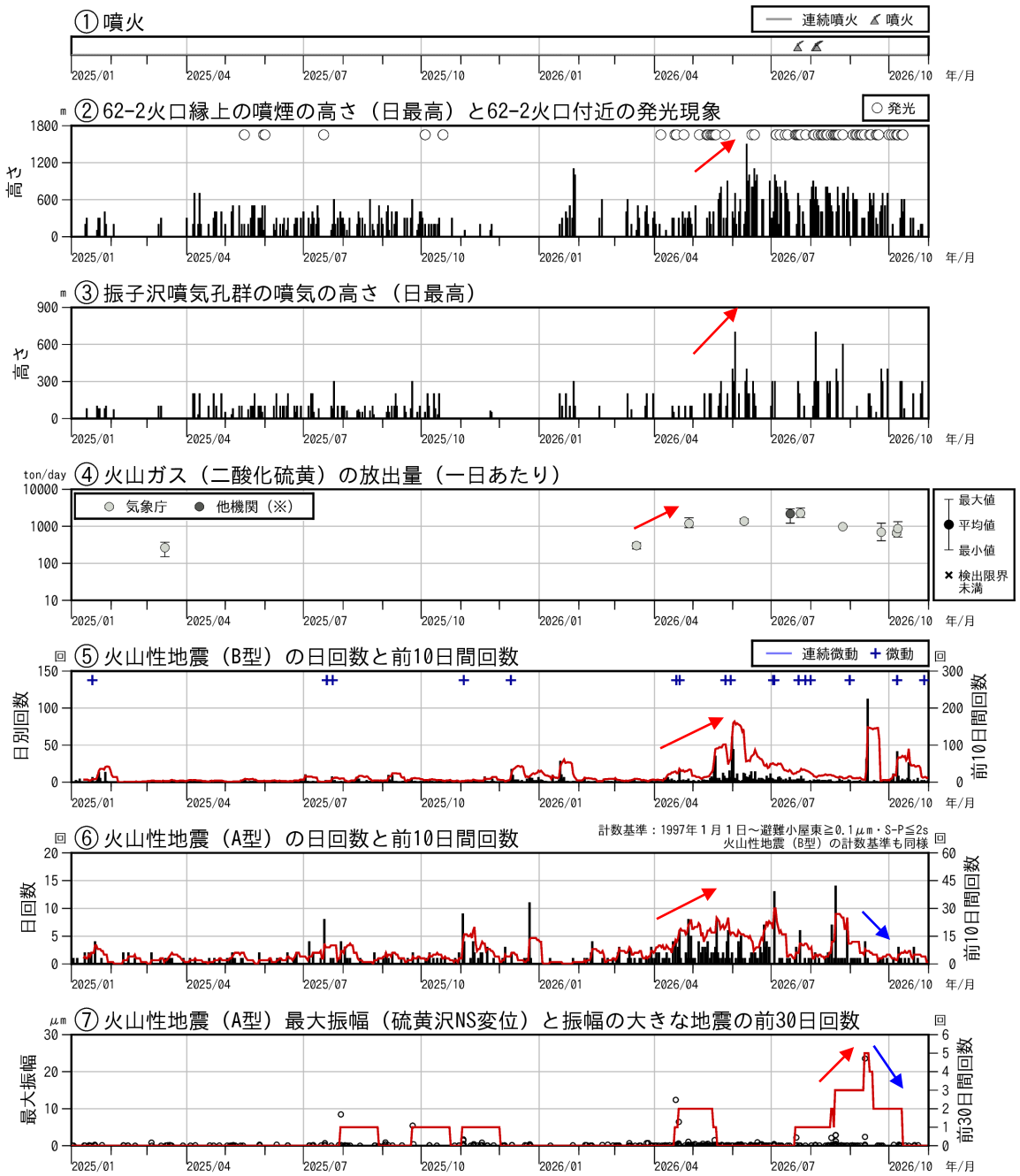


図３　十勝岳　火山活動経過図（2025 年１月～2026 年 10 月）

②の発光を示すプロットは、監視カメラで 62-2 火口付近（62-2 火口内及びその近傍、振子沢噴気孔群も含みます）で発光が観測された日を示します。
④他機関（※）は機動的な調査観測・解析グループ（防災科学技術研究所・東京大学）及び北海道大学の観測を示します。
⑤は主に 62-2 火口付近のごく浅い所（図６参照）で発生したと推定されるＢ型地震の回数、
⑥は主にその周辺で発生したと推定されるＡ型地震の回数を示します。また、赤折れ線はそれぞれの前 10 日間の積算回数を示します。
⑦の赤折れ線は振幅の大きな火山性地震（山麓の硫黄沢観測点で最大振幅２μｍ以上）の前 30 日間の積算回数を示します。

・４月頃に火山ガス（二酸化硫黄）放出量（④）が増加し（赤矢印）、その後も多い状態が続いています。
・62-2火口や振子沢噴気孔群付近の噴煙・噴気の高さ（②③）は５月以降さらに高まり（赤矢印）ました。９月頃からやや衰退傾向が認められますが、引き続き活発に推移しています。
・４月以降、62-2火口付近及びその周辺の地震活動（⑤⑥）がやや活発化（赤矢印）していますが、62-2火口周辺の地震（⑥）は、９月頃から減少して推移しています（青矢印）。
・山体付近を震源とする振幅の大きな火山性地震（⑦）が８月中旬から９月中旬にかけて増加しましたが（赤矢印）、９月13日以降は発生していません（青矢印）。

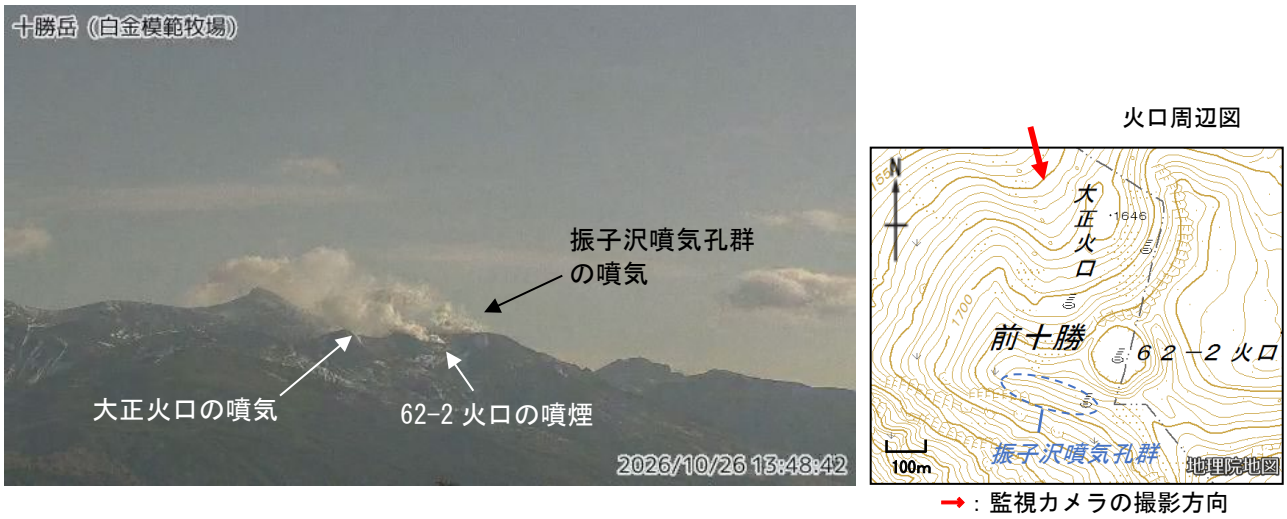


図４　十勝岳　北西側から見た火口周辺の状況（白金模範牧場監視カメラによる）及び火口周辺図



図５　十勝岳　62-2 火口付近で観測された発光現象（火映）
４日夜に観測された火映（白金模範牧場監視カメラによる）

表１　十勝岳　2026 年 10 月に観測された 62-2 火口付近の発光現象（高感度の監視カメラによる）

※１：発光現象により火口上の雲や噴煙が明るく照らされた現象を観測した場合には、火映として表記しています。

※２：強度０は肉眼では確認できず監視カメラ（高感度カメラ）によってのみ確認できる程度の火映・発光現象、強度１は肉眼でようやく認められる程度の火映・発光現象を示します。

62-2火口付近とは、62-2火口内及びその近傍を示し、振子沢噴気孔群も含む領域を示しています。

観測日	発光現象※１	発光現象の強度、発生状況
１日夜	火映	強度０、断続的
３日夜	火映	強度０
４日明け方	火映	強度０
４日夜～５日未明	火映	強度０、断続的
６日夜～７日明け方	火映	強度０、断続的
７日夜	発光現象	強度０、断続的
11 日夜	発光現象	強度０、断続的

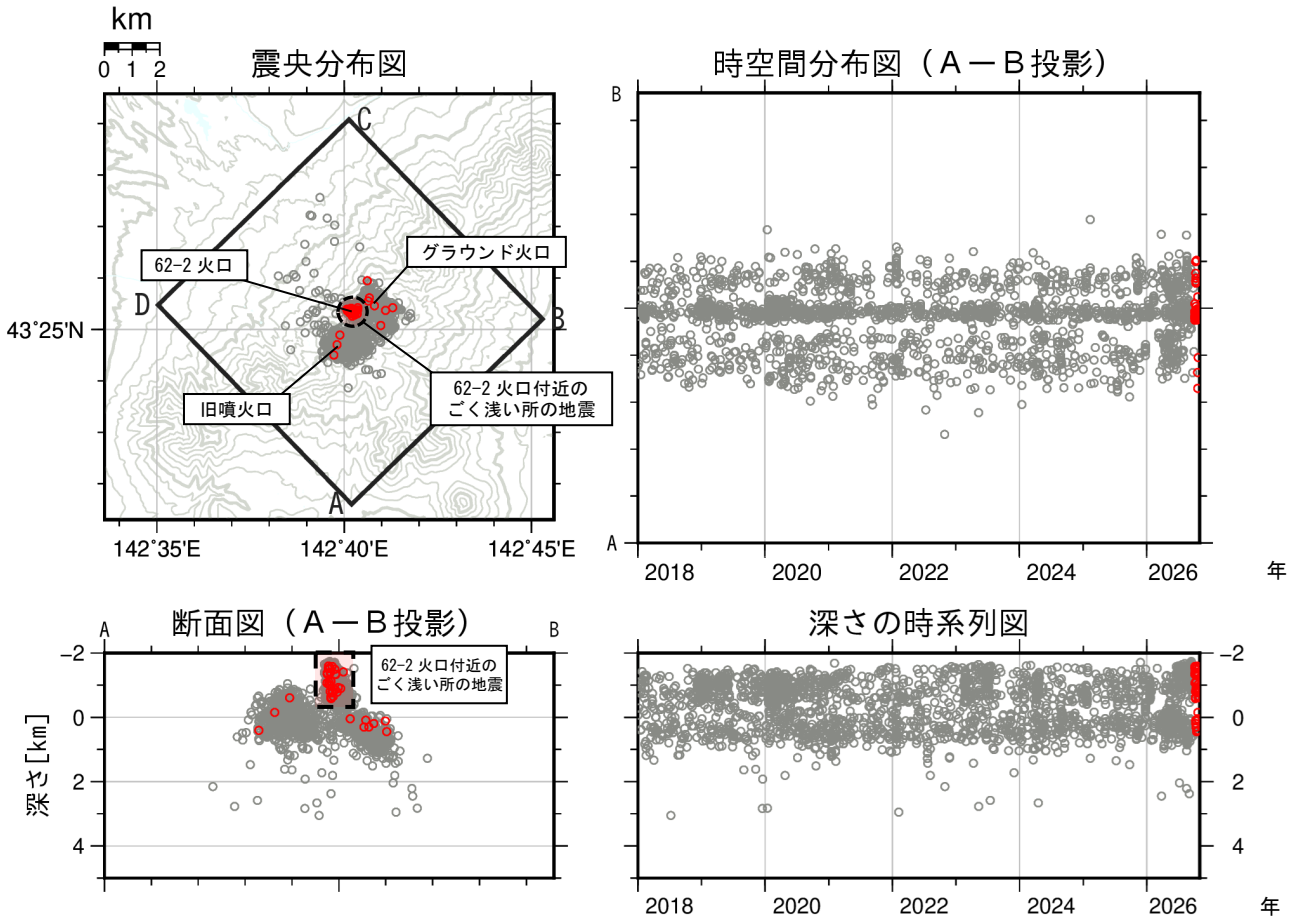


図６　十勝岳　火山性地震の震源分布（2018年１月～2026年10月）

○：2018年１月～2026年９月の震源　○：2026年10月の震源

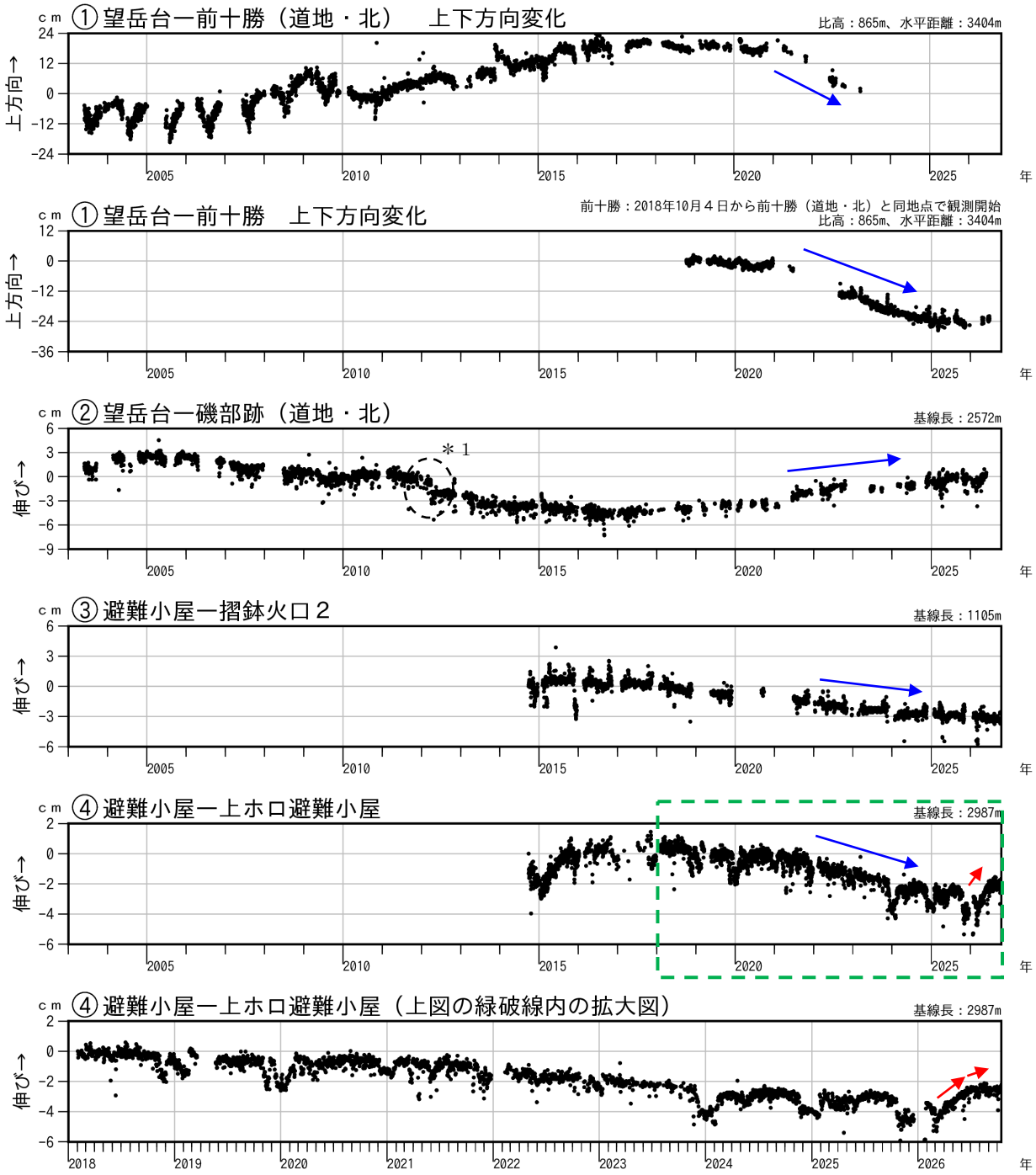


図7-1　十勝岳　GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年５月～2026年10月）

グラフ①～④は観測点配置図（図８）の基線①～④に対応しています。
グラフ中の空白部分は欠測を示します。
冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。
2010年３月の前後で解析方法が異なります。
白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。
＊１：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

・基線①～④では2021年頃から山体浅部の収縮を示すと考えられる基線長の変化及び沈降（青矢印）が観測されていましたが、2022年頃からやや鈍化し、2024年秋以降は特段の変化は認められません。ただし、62-2火口のごく近傍の観測点を含む基線①では、観測点付近の局所的な変形の影響も受けていると考えられます。
・基線④では2026年３月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びの変化（赤矢印）が認められていますが、８月頃から鈍化しています。

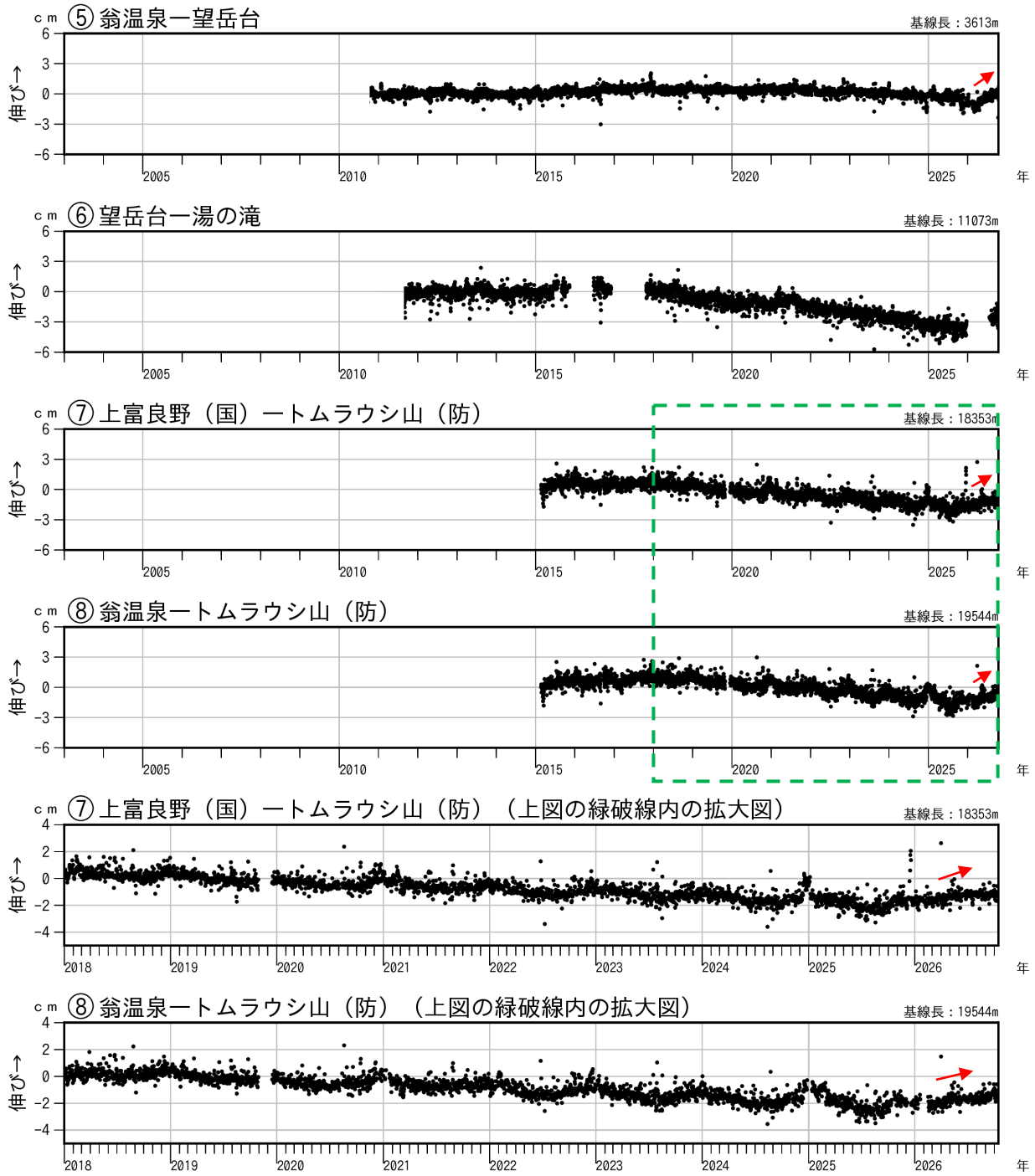


図7-2　十勝岳　GNSS連続観測による基線長変化（2003年５月～2026年10月）
グラフ⑤～⑧は観測点配置図（図８）の基線⑤～⑧に対応しています。
グラフ中の空白部分は欠測を示します。
冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。
白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

・基線⑦⑧では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いていました。2026年３月頃からは基線⑤⑦⑧で伸長※（赤矢印）が認められていますが、８月頃から鈍化しています。これらの基線の伸びは、山体付近のやや深部の膨張を示していると考えられます。

※例年８月頃から12月頃には同程度の伸びが認められますが、これは大気の状態変化の影響によるみかけ上の変化と考えられます。2026年３月頃からは、これらとは異なる伸びが認められています。

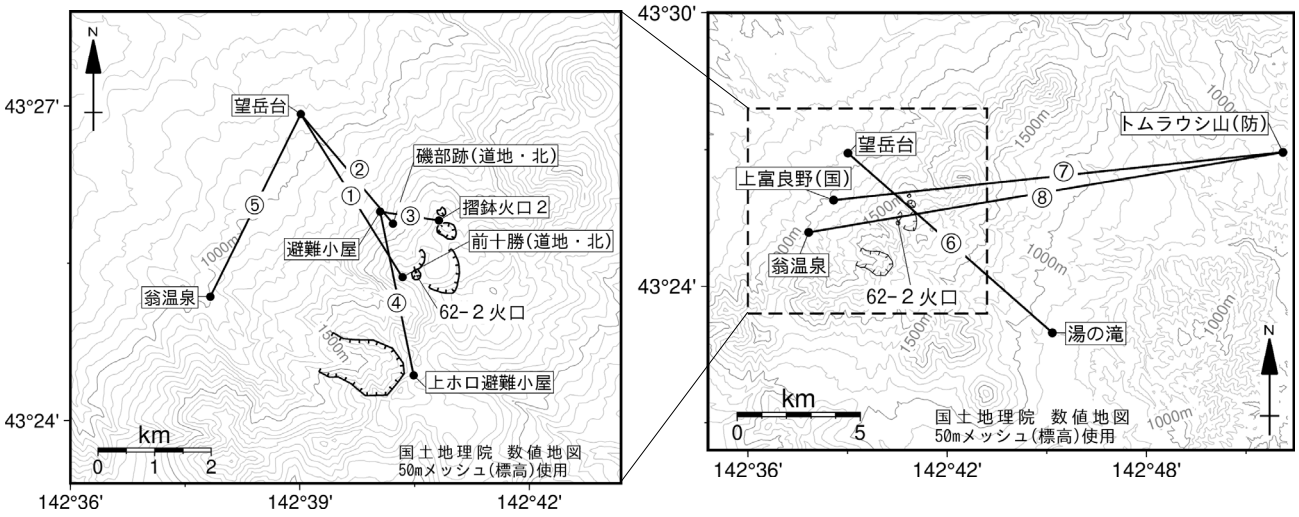
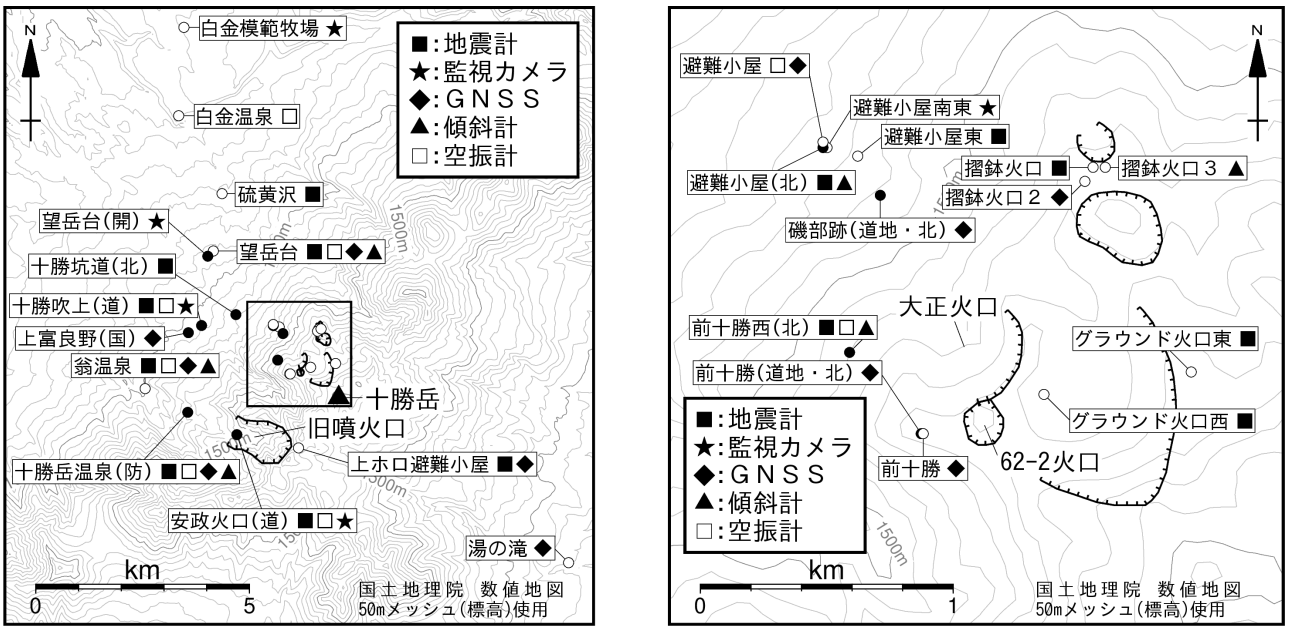


図８　十勝岳　GNSS連続観測　観測点配置図

図中の基線④は図２のグラフ⑧に対応しています。
図中の基線①～⑧は図７のグラフ①～⑧に対応しています。



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は他機関の観測点位置を示しています。
(開):国土交通省北海道開発局、(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道、
(道地):地方独立行政法人北海道立総合研究気候エネルギー・環境・地質研究所

図９　十勝岳　観測点配置図